

## アイディアソン：未来の農村で何をしたいか？

### The Best Way to Predict the Future of Agriculture is to Design it

○杉野弘明<sup>1</sup>・溝口勝<sup>1</sup>

SUGINO Hiroaki, MIZOGUCHI Masaru

#### 1. はじめに

例えば、図 1 のような場面に遭遇したとする。この写真は東京大学農学部弥生キャンパスの中で撮られたものである。人間と環境を一つの系として、そこに生じる相互浸透作用を研究対象とする環境心理学を学んだ者の目からすると、そこには一つ大きな気になる点がある。読者の方々も、何か気付くことがあるだろうか。

緑が生い茂っており、木漏れ陽の気持ちの良いキャンパス。確かにそれは正解であり、四季を通して景色が楽しめるキャンパスとして、私も気に入っている。しかし、私として一つどうしても気になるのは、写真中央左側の植栽が剥げてしまって土が露わになっている部分である。これはキャンパス利用者の方々が、本来は立ち入ることが想定されていない場所を通過し、それが蓄積することで“道”となっているのである。こういった現象を「物理的痕跡(physical trace)」<sup>1)</sup>と呼び、環境心理学者は見逃さない。なぜなら、それが発生するところには、人間の行動と環境のデザインの間にはミスフィットが発生している可能性が高いからだ。この物理的痕跡は、何かをデザインする時には、現在の状況だけでなく、遠く将来の状況も深く考えなければならないことを示唆している。



図 1. 弥生キャンパスの一場面

急な弥生キャンパスのデザインの不備についての話で、農業農村工学や農業土木と何が関係あるのだろうか、と疑問に思った方もいるかもしれないが、筆者は農業農村工学にこそ、デザインという言葉が相応しいと考えている。デザインとは、「装飾する」や「綺麗にする」という意味も持っているが、もっと根底にある原義は「目的をもって具体的に立案・設計すること」である<sup>2)</sup>。デザインは「芸術の表現」ではなく、「目的の表現」であるし、デザイン力は「装飾力」ではなく「問題解決力」である。そういった意味で、農業農村工学は長くその歴史の中で、農業や農村における問題解決(デザイン)の部分を担当してきた学問だと言えるのではないだろうか。

その農業農村工学分野において情報農学の研究部会は、特に近年の「AI」や「IoT」といった情報工学分野における発展に歩を合わせるように、今まさに未来の農村をデザインする役割を負っている。2010 年以降のデータサイエンスの発展と共に、農業分野においてもビッグデータや ICT といったキーワードと共に、各種データがインターネットを通じてウェブ上に集約されていく動きがあり、古くから観測されてきているデータについても紙媒体から電子媒体への記録へと移行してきている。一方で、その蓄積された情報の活用はユーザーが位置する農山村部において必要とされるものでありながら、情報インフラの裾はそこに至るまで整備されていない。未だこの情報インフラの農山村部における“ラストマイル問題”は解消されていないのが現実である。しかし、だからこそ、今、未来の農村の姿を議論し、デザインする意義がある。なぜなら「The best way to predict the future is to design it. (未来を予測する最良の方法は、自分たちの手でデザインしてしまうこと)」<sup>3)</sup>だからである。

<sup>1</sup> 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Science, The University of Tokyo, キーワード：ワークショップ, アイディアソン, デザイン思考, イノベーション

## 2. アイディアソンに臨むにあたって

当該企画セッションに参加される方々には、事前に以下の簡単な2点を考えてきて頂く必要がある：1)自分の専門性の中で興味関心を持っていること、得意なこと、できること、2)未来の農村地域や農業農村工学の姿や期待、希望。その際には、是非「関係しないかも？」や「現実的ではないかも？」といった気持ちを一旦排し、自由な発想をお願いしたい。なぜなら、未来の農村の姿は、「どうなるか？」という受動的姿勢で向き合うべきものではなく、「どうしたいか？」という農業農村工学が持つ素朴で、かつ能動的な問題解決の姿勢により提示されるべきであるからだ。

また、本アイディアソンは、以下の3つの発表の後に行われる：①「Society 5.0」のキーワードの下に農業農村振興政策が如何に進められているのか、②農業農村工学におけるAIと最先端技術の現実的な利用可能性はどういったものなのか、そして③実際のスマート農業の現場におけるAIの活用事例について。これらの豊富な情報を有した講演中、参加者の方々には、上記の各自持ち寄った2点にそれぞれの講演内容を結び付けて考えて頂きたい。各人の専門性から生まれ出た未来の農村の姿のアイディアは、異なる分野の専門知識と絡まり、現実的に考えることができる可能性は大いにあるし、その時点にてまた新しい農村の未来が見えることもあるかもしれない。

もし、自身のアイディアと他の異なる分野の知識をうまく掛け合わせることができなと感じた場合には、以下の考え方を試して頂きたい。

- a. 自分の専門性や興味関心、および自分が持ってきた未来の農村の姿をさらに細かい要素に分けてみる。
- b. a.において因数分解された未来の農村の“ある要素”を実現するためのアイディアを「自分の専門性×講演中の技術」で出す。
- c. b.において出されたアイディアを基に、もし自分が今回のセッションにおける3人の講演者の内の一人だったとして、自身の抱える未来の農村がどのように実現されるのかを如何にプレゼンするかを妄想する。

## 3. アイディアの共有と皆で考えることの意義

冒頭で紹介した弥生キャンパスのデザインの不備の例は、時間的スケールの長い未来に思いを馳せ、デザインすることの重要性を教えてくれる。本セッションに参加される方々に持ち寄って頂く「未来の農村の姿」のさらにその先の未来にまで思いを巡らせる必要がある。それはつまり、未来のいろいろな可能性、つまり「ほぼ確実に起こる未来」から「もっともらしい未来」そして「理論上起こり得るかもしれない未来」までのスペクトラム<sup>4)</sup>を広く視野に入れることである。先のキャンパスの例においても、敷地内に当初計画されていた建物以外にも多くの建物が規模の拡大と共に建設され、人々の歩行ルートのパターンが変わるかもしれない、という未来まで思いが届いていれば、デザインはまた違った解答を示していたかもしれない。この様々なパターンの未来を予想するには、人間一人の頭では限界が生じる。アイディアは個人の頭の中から出すことはできても、それを普遍的なデザインにまで落とし込むには多くの他の人々の目を借りた方が効率的である。

このアイディアソンにおけるディスカッションにおいては、是非未来の農村を担うアイディアの種を共有すると共に、さらにその先の未来についても多くの参加者の方々に共有することで考えられる未来の幅を広げ、より本質的な議論が生まれることを期待する。そして、共有された農村の未来像から遡ることにより、現在まだ整備が追い付いていない、農村部における情報インフラをどのように整備しデザインするべきか、が見えてくるだろう。

農村の未来が本企画セッションの参加者の方々によって描かれ、それに向かって農業農村工学が多くのデザインを生むことを願っている。

### 参考文献

- 1) Wicker, A. W.: Ecological Psychology: Historical contexts, current conception, prospective directions, Wiley (2002).
- 2) 各務太郎: デザイン思考の先を行くもの, CrossMedia Publishing (2108).
- 3) R. Buckminster Fuller: Operating Manual for Spaceship Earth, Lars Muller (2008).
- 4) A. Dunne & F. Raby: Speculative Everything: Design, Fiction, and Social Dreaming, The MIT Press(2013).

<sup>1</sup> 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Science, The University of Tokyo, キーワード: ワークショップ, アイディアソン, デザイン思考, イノベーション